

# Rich ~ピチヤリ~

七飯町歴史館だより

第82号

## ななえ古写真物語

VOL. 82

### ななえの古刹

護国山 宝琳寺

時代不明

桜町地区



七飯町にある多くの寺社の中でも、古くからある寺のひとつに宝琳寺（ほうりんじ）があります。現在も杉の古木が本堂の前にあり、春になると桜がとてもきれいに立ち並ぶ寺で、墓地には七飯町第2号指定文化財の「飯田甚兵衛の地蔵」や「箱館戦争戦死者墓碑群」が人知れず残されていたり、各々の墓石を観察しても江戸時代のものも見られるなど、その歴史の古さを感じます。

また、境内には大正8年に、寺沢大峰和尚の発願と、壇信徒の協力により建立された三十三観音のうち、第1番と33番が並び、その他は寺から約400m程山側にある「観音講山」と称する場所に安置されているそうです。

宝琳寺の由緒については、元和元年（1615年）頃にはすでに、字一本桜に地蔵菩薩の堂宇があったといわれ、そこには、釈迦牟尼仏が祀られていたが、文化12年（1815年）、祖雲という住職の代の時、仏堂が建立されたそうです。また、開基は函館の高龍寺十一世華重禅海と伝えられ、その後、慶応2年に梅庵達禅が住職になりました。さらには、明治31年に北海道庁から寺号公称が許可されたといったことが『七飯町史』に記されています。

その他、大正5年発行の『七飯村史』にも同様のことが書かれているが、地蔵菩薩の堂宇から仏堂が建立されるまでの期間についてなど、わからない事が多々あるほか、明治はじめに、七飯町の土地を借りたドイツ人R・ガルトネルが、自分の所有地とそれ以外を線引きするため、目印となる杭を打った場所を記している図面にも「高龍庵」という名称で建物が描かれているなど、その呼び名についても時代によって多少違うようで、さらなる調査をして精査する必要があると感じている。

ところで、上の写真は当館で長い間、資料登録もされずに保管されていたもので、宝琳寺と書かれた付箋がついていたものの、詳細な時代や寄贈者もわかっていない古写真である。そのため、ここに写っているお堂が、本当に宝琳寺なのか断定が難しいが、昭和40年代に撮影されたものと比較して、建物の構造や周囲の木々の様子から、おそらく同一のものであると推測している。

ななえの古刹「宝琳寺」。400年以上の歴史を持つ由緒ある寺が、現在も壇信徒の方々を中心に支えられているのかと思うと、改めて町の歴史の奥深さを感じずにはいられない。

### 3日

夜の博物館第4回講座は、「自然を考える」と題し、自然公園指導員の金澤晋一氏をお迎えして、世界で一番の動植物たちの紹介から、鳥やハートの形をした身近な植物の種の観察まで、知っているようで知らない生き物の世界を、重ねた経験をもとに、嬉々としてお話になる金澤氏の姿に、参加者の皆さんも、惹きこまれていました。



### 6日

ふあみりーでいみゅーじあむで「月見だんごづくり」を行いました。まずは、中秋の名月にちなみ、秋の七草を写真を見ながら学びました。その後は、いよいよだんごづくり。親子仲良く白玉粉と上新粉をこねたり、切ったり、丸めたり、茹でたりしながら、だんごが完成！最後に絵本の読み聞かせを聞きながら、しょうゆダレにつけただんごをみんなでいただきました。いい笑顔で食べてましたよ。

### 27日

ジュニア探検クラブで、春のプログラムで植えたマリーゴールドを使って、草木染に挑戦しました。

今回は花だけではなく、茎や葉も使って染めてみました。まずは畑の雑草を抜き、メインのマリーゴールドを収穫！資料の「押切」という牧草をカットする道具を使って細かく刻み、ボールに水を入れて煮出して染液を作り、そこに、輪ゴムでしばった「さらし」を投入です。1時間ほど煮たら、さらしを取り出し、輪ゴムを外して広げてみると個性豊かな和手ぬぐい(?)の出来上がり。染液の匂いと闘いながら一生懸命頑張った子どもたちでした。



1	土
2	日
3	月 文化の日
4	火
5	水
6	木
7	金
8	土
9	日
10	月
11	火 館外展OPEN
12	水
13	木
14	金
15	土
16	日
17	月
18	火
19	水
20	木
21	金
22	土
23	日 勤労感謝の日
24	月 振替休日・館外展CLOSE
25	火
26	水
27	木
28	金
29	土 ジュニア探検クラブ
30	日

※11月の休館日はありません。

#### 土器焼き

大沼小学校鈴蘭谷分校で、土器の野焼きを一緒にしてきました。秋とはいえ、火力の強さに顔まで赤くなりましたが、芸術の秋を楽しめましたよ。



#### 編集後記 ~tawagoto~

現在、歴史館周辺の木々は、赤や黄に染められた葉で覆われている。風が吹くごとに舞う色たちの踊りが、きたるべく冬への移ろいを感じさせます。

遠くへ視線を向けると、同じく赤と黄のパッチワークで山々が着飾っている。吐く息がほんのりと白味を帯び、冷たさではなく寒さを優しく知らせてくれる。仕事合間の一服中に感じた事を、つらつらと綴ってみると、息抜きも無駄じゃないと思うのだが、それは多分言い訳だろう。(やまだひさし)

~ピチャリ~  
Pichari 第82号

平成26年10月20日 発行

七飯町歴史館

〒041-1193 亀田郡七飯町本町6丁目1-3

電話 0138-66-2181 FAX 0138-66-2182

E-mail: rekishikan@town.nanae.hokkaido.jp